

【静岡県掛川市】

TAKE FREE

KAKEGAWA CASTLE

掛川城 家康読本

徳川家康で
読み解く
掛川城の歴史

TALES OF KAKEGAWA CASTLE



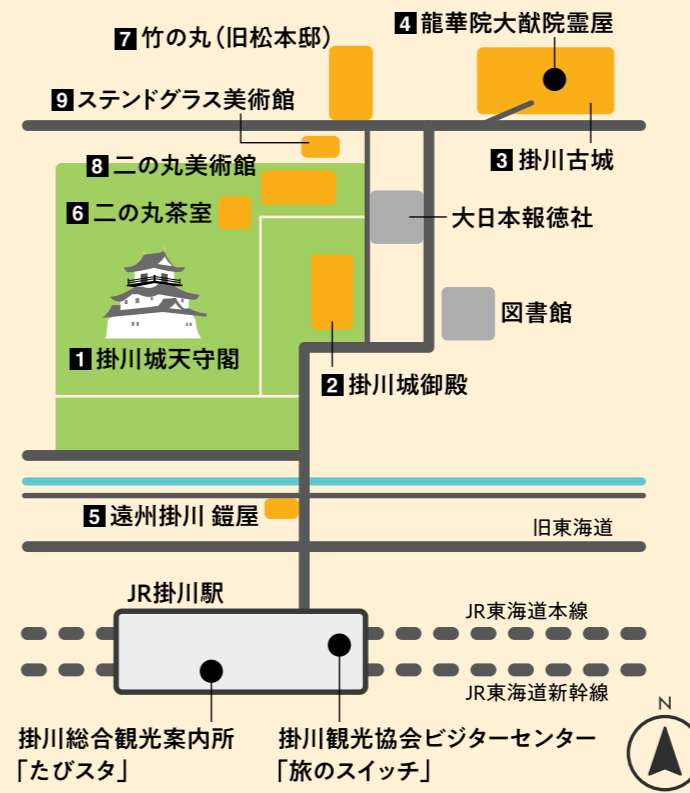
CULTURAL ASSETS
IN KAKEGAWA
vol. 02

AN EXCITING ADVENTURE JOURNEY

駅から歩いて家康巡り

徳川家康を感じる 掛川ぶらぶらMAP

ぜんぶ掛川駅から
徒歩数分！
ゆつくりお散歩しながら
家康を感じる
観光ポイントをご紹介します。



1 掛川城天守閣
日本初の本格木造復元天守閣、「東海の名城」と謳われる。
☎ 0537-22-1146
🕒 9:00~17:00(入館16:30まで)
🗓 年中無休
<http://kakegawajo.com/>



2 掛川城御殿
全国に数カ所しかない城郭御殿、国指定重要文化財。
☎ 0537-22-1146
🕒 9:00~17:00(入館16:30まで)
🗓 年中無休
<http://kakegawajo.com/goden/>



3 掛川古城
戦国時代、今川方の出城として使われた山城。大堀切は圧巻。
🗓 常時散策可



4 龍華院大猷院霊屋
徳川三代将軍家光を祀る霊廟、県指定有形文化財。
※霊屋内部は、一般公開されていない
🗓 霊屋周辺は、常時散策可



5 遠州掛川 鎧屋
徳川家康の金陀美具足のレプリカが展示されている。
☎ 0537-21-4618
🕒 10:00~17:00
🗓 月・金・他不定休有
<https://yoroiya.hamazo.tv/>

お散歩途中の観光ポイント



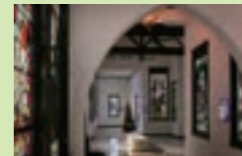
6 二の丸茶室
「掛川茶」の煎茶・抹茶を楽しめる城内にある茶室。
☎ 0537-23-1199
🕒 9:30~17:00(入館16:30まで)
🗓 部屋貸9:30~21:00 年中無休
<http://kakegawajo.com/guides/tya/>



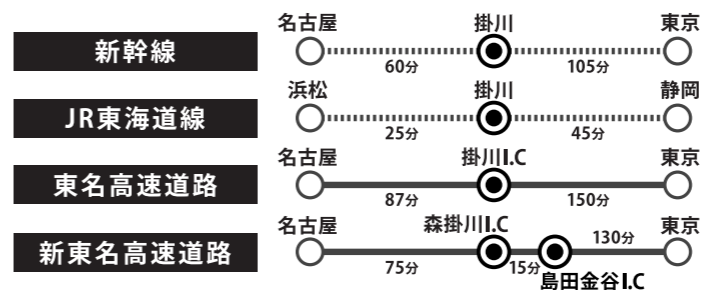
7 竹の丸(旧松本邸)
明治末期の意匠による和洋折衷の近代和風建築。
☎ 0537-22-2112
🕒 見学9:00~17:00(入館16:30まで)
🗓 部屋貸9:00~21:00 年中無休
<http://kakegawajo.com/take/>



8 二の丸美術館
江戸時代の細密工芸品と近代日本画のコレクション。
☎ 0537-62-2061
🕒 9:00~17:00(入館16:30まで)
🗓 月曜日、展示替、施設メンテ
<https://k-kousya.or.jp/ninomaru/>



9 ステンドグラス美術館
世界的に貴重な19世紀英国のステンドグラスを展示。
☎ 0537-29-5680
🕒 9:00~17:00(入館16:30まで)
🗓 月曜日、施設メンテ
<https://k-kousya.or.jp/stainedglass/>



ACCESS TO KAKEGAWA
掛川への
アクセス

各種クーポンやプレゼント付き!

掛川(得)パスポート



6施設の入館・入場料合わせて
通常3,320円のところ

2,000円(税込)

6施設入館可能

1 掛川城天守閣・御殿	2 竹の丸	3 二の丸茶室
4 掛川花鳥園	5 二の丸美術館	6 ステンドグラス美術館

●上記6施設+ビジターセンター「旅のスイッチ」にて販売中。

🗓 掛川観光協会ビジターセンター
(JR掛川駅南口構内) / 0537-24-8711



TALES OF KAKEGAWA CASTLE

掛川城を読み解くカギは徳川家康にあった

The Key to the Mystery

「はじめに」

掛川城と徳川家康の関係は、永祿十二年（一五六八）、今川家当主の今川氏真がこもる掛川城に徳川家康が攻め込んだ、「掛川城攻め（掛川城の戦い）」に始まります。

掛川城は、駿河守護今川氏による遠江侵攻の足掛けとして、重臣朝比奈氏により十五世紀末に築かれました。その後、朝比奈三代約七十年間の治世を経て、掛川城攻めにおいて徳川家康が奪取すると二十余年にわたり徳川氏が領有しました。掛川城の歴史において半年間に及んだ今川・朝比奈氏との戦いは、徳川氏にとっての遠江の覇権掌握とともに、名門今川氏の滅亡と言う東海戦国史においても画期となった事件（戦い）でした。

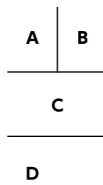
掛川城と言えは、多くの人が「日本初の本格木造復元」で知られる白亜の天守を思い浮かべることでしよう。掛川城において初めて天守を築造した山内一豊が、近世城郭としての礎を築き、現代の我々が体現できる近世城郭掛川城のイメージを作ったと言っても過言ではありません。

ここでは、近世城郭としての掛川城ではなく、戦国時代、画期となった掛川城攻めにスポットを当て、戦いに至った原因とその背景、経過を説明します。その上で、掛川城に見る徳川家康の

痕跡を紹介します。

掛川城からわずか五〇〇m程の地点には、掛川城攻めにおいて今川方の出城として使われた掛川古城があります。しかし、戦いがあったことを知る人は少なく、現在は寺院、公園として四季折々の木々花々に囲まれひっそりと佇んでいます。城郭としての古城の構造と、そこに残された家康の痕跡を紹介します。

掛川古城の本曲輪※2には、三六〇余年の歴史をもつ龍華院大猷院霊屋（以下、霊屋）が鎮座しています。この霊屋の建立の契機と背景を紹介するとともに、霊屋と家康とのかわり方を紹介します。



【A.掛川城大手門】掛川城の表玄関にふさわしい二階造りの門。平成7年（1995）に復元された。【B.掛川城天守】端正なフォルムの外観から「東海の名城」と謳われる。平成6年（1994）に復元された。【C.新緑に映える龍華院大猷院霊屋】古城に展開する桜花や紅葉の四季折々の彩りのなかでも、新緑と端正な霊屋の極彩色のコントラストは秀逸。【D.大堀切斜面の大木】急斜面にへばりつくように根をおろした大木は、古城の星霜を物語る。



※1 【出城】 本城である掛川城を支えるための城。
※2 【曲輪】 城の内外を土塁・石垣・堀等で区画した区域。

徳川家康による 掛川城攻めに ついて

二 今川氏の凋落と 掛川城攻め前夜の遠江

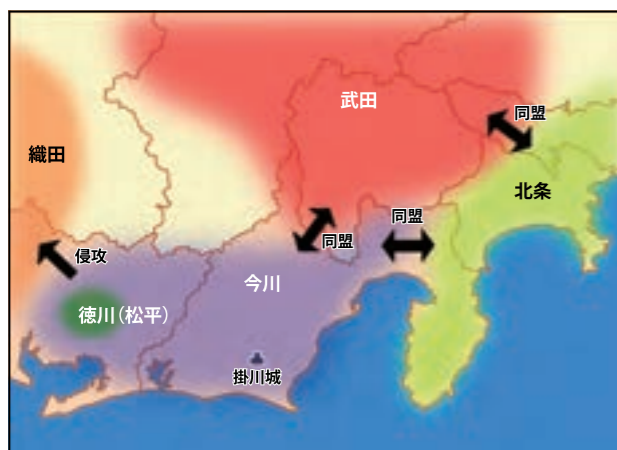
徳川家康こと幼い頃の松平元康は、国（三河）を失い、父を亡くし、母とも離れ、駿河の戦国大名今川氏の人質として、ひっそりと生涯を終えると思われていました。※3ところが、家康十九歳の時、それまでの人生において最大とも言える事件が起こります。永禄三年（一五六〇）桶狭間の戦いで、織田信長により、家康の主君今川義元が討たれると、今川領の三河には激震

なりました。さらに家康による今川領国の切り崩しは遠江に及び、それは甲斐の武田信玄による駿河侵攻を刺激することになりました。今川氏の勢力が衰えた永禄十一年（一五六八）頃になると家康と信玄は、今川攻め（遠江・駿河への侵攻）において利害が一致したのです（信玄が駿河、家康が遠江と、それぞれ今川領を分割する密約があったとされます）。
当時の駿河・遠江の状況は、表面上、武田・北条・今川氏による甲相駿三国同盟が継続されていました。そのため家康が遠江に侵攻すれば、今川氏と同盟関係にある北条氏に攻撃される危険性がありました。ところが、前述のような家康と信玄の利害一致によりその危険性は回避されることとなりました。
永禄十一年（一五六八）十二月六日、ついに武田軍が駿府館へ乱入、駿府館を追われた今川氏真は朝比奈泰朝の守る掛川城に逃げ込みました。それに呼応するかのよう、十二月十二日、家康は七千余の兵をもって掛川城への侵攻を開始します。十九日には徳川方となった久野城の久野宗能に命じ天竜川に橋を架かせ、翌二十日には掛川城から一里のところへ家康も布陣、掛川城に迫りました。対する今川勢は三千余の兵が籠城していたとされます。



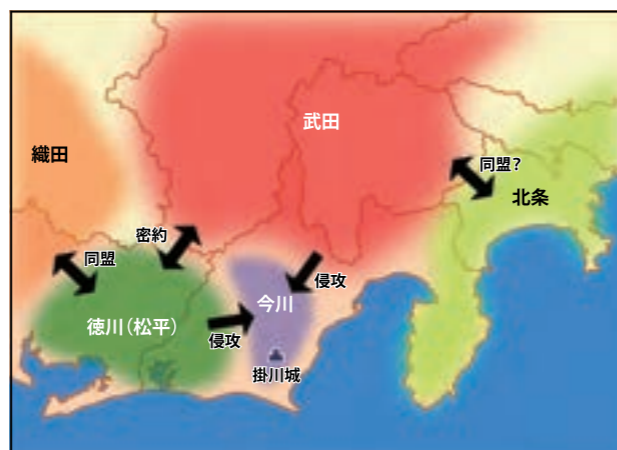
徳川家康の遠江侵攻

徳川家康は、7千余の三河勢を率い三河国境から本坂峠を越え、井伊谷を経由し遠江に侵攻した。井伊谷城・白須賀城などの今川氏の諸城を次々と陥落させ、要衝宇津山城を落とすと浜名湖周辺を制圧した。さらに伊那から遠江へ侵攻していた武田方の秋山虎繁を撤退させ、遠江の要衝引馬城への入城を果たした。これほどまでに早期に西遠制圧に漕ぎ着けたのは、井伊谷三人衆（浜名湖北東岸の井伊谷周辺に割拠し、今川方から徳川方へ離反した三人の武将、菅沼忠久・近藤康用・鈴木重時）の懐柔と、侵攻の際の三人衆の先導役によるところが大きい。



遠江・駿河周辺の勢力図（桶狭間の戦い）

今川義元は周辺国と同盟関係を選び、駿河・遠江・東三河にいたる広大な地域を支配した。さらに予先を西へと向け、織田領に侵攻した。



遠江・駿河周辺の勢力図（掛川城攻め）

今川義元亡き後、今川領は武田・徳川両氏により東西から侵攻された。義元の後継氏真は、駿府館を追われ掛川城へ逃げ込んだ。

が走りまわった。その激震とは、全盛を誇っていた名門今川氏の滅亡への序章でもありました。桶狭間の戦いを契機とし、家康は三河の弱小国の一武将として生きる運命を受け入れ、尾張の織田信長と同盟を結ぶことで、今川氏からの独立を図りました。その動きに同調するかのよう三河の今川方の諸将・国衆※4の離反が相次ぐこととなります。これが「三州錯乱」と呼ばれるもので、やがてその離反劇は遠江にも波及していきます。家康による西遠の諸氏の懐柔にくわえ、北遠の国衆には武田信玄からの離反の働きかけもあり、遠江は「遠州念劇」と呼ばれる混乱状態に陥りました。
永禄五年（一五六二）頃から、井伊谷城の井伊直親、引馬城の飯尾連龍、犬居城の天野景貞、堀越城の堀越氏延らの遠江諸将・国衆が離反していきます。この離反に対し今川氏真も離反阻止に動き、見せしめとして井伊直親（徳川四天王、井伊直政の父）を掛川城下にて殺害、逆心を企てた飯尾連龍の引馬城を攻めました。
「三 家康、掛川城攻めに出陣」
三河を死守していた今川氏でしたが、永禄八年（一五六五）今川方にとっての三河の要衝吉田城の陥落により、ついに三河を失うことに



十九首塚

掛川城下の西端、宿場町への入り口手前がある首塚。天慶2年（939）平将門の乱にかかわる首塚とも、井伊直親が殺害された場所とも云われる。



遠州念劇

当主義元の討死後、氏真は越後の上杉謙信の関東侵攻の対応にも追われ、三河・遠江の安定化に専念できずにいた。その結果、国衆は今川氏の政治的・軍事的な保護を得ることが難しい状況となり、今川氏との従属関係の見直しを迫られていた。今川方に付くか、反今川として反旗を翻すかの内乱状態に加え、一族内でも武田・徳川のどちらかに付くかの帰属をめぐる内訌に及ぶこともあり、混沌とした状況が見て取れる。

※内訌（ないこう）：内紛、内輪揉め。

※3 近年の研究によれば、元康は今川家中で親類衆（親族衆）として処遇され、人質ではなく今川氏の三河支配を支える一門格であり、有力国衆であったと考えられている。
※4 【国衆】 戦国時代に一定の領域を支配した領主のことで、戦国大名の家臣ではあったが、戦国大名同様配下に一門・家臣の集団を持ち、排他的かつ一門的に領域支配を行っていた。

掛川城コラム ①

山内一豊の掛川城



正保城絵図

天正18年（1590）、徳川家康49歳の時、豊臣秀吉により天下統一され、それまで掛川城を含めた遠江を領有していた家康は秀吉により関東に移封されてしまいます。すなわち、家康は関東に追いやられてしまいました。

さらに秀吉は、関東の家康を牽制するため東海道、中山道をはじめとする街道筋の要衝の城郭に、秀吉配下の武将を配置し、城郭整備をさせます。掛川城には山内一豊が入城し、一豊は最新技術を導入し、石垣を築き、天守に代表される高層の瓦葺き建物を建て、近世掛川城の礎を築きました。現在復元されている掛川城は、近

世城郭として整備と拡張された17世紀中頃の様子がイメージされています。

掛川城・駿府城・浜松城をはじめとする関東に通じる東海道の要衝の城郭は、石垣に囲まれ天守をはじめとする瓦葺きの高層建物が建ち並び、市井の人々にとってこれまで見たこともない城郭へと変貌したのです。人々は、少なからず驚嘆したはず。

石垣、天守には城郭としての戦うための機能的側面とともに、秀吉は人々にそれらを見せつける、いわば権力誇示のシンボルとして配下の武将に城郭整備をさせたのです。

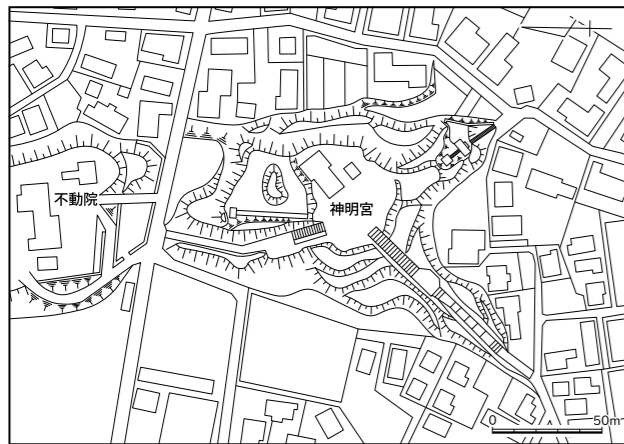
掛川城包囲網と 今川・徳川両軍の総力戦

家康は、まず北方の相谷砦に本陣^{※5}を置き、長谷砦・曾我山砦・天王山砦の陣城を築きました。さらに、永禄十一年（一五六八）十二月二十六日には金丸山砦・青田山砦・笠町砦を築いており、掛川城包囲網が急速に整えられていったことがわかります。十二月二十七日には本陣を相谷砦から天王山砦に移し、掛川城下を放火するなど徳川方の攻撃が始まりました。

年が明け、永禄十二年（一五六九）正月十六日、家康は青田山砦・笠町砦・金丸山砦の守備の強化を命じ、自身も本陣の天王山砦に出陣、本格的な合戦が始まることとなります。掛川古城周辺では両軍の総力戦が展開、一進一退の攻防が続けられていました。

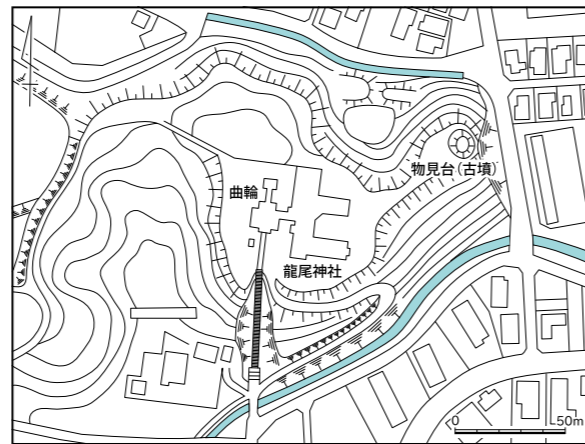
その後、膠着状態が続くなか、家康はさらに六ヶ所の陣城を築き包囲網の強化を図りました。

三月四日、家康は戦況打破を期して再度出陣、徳川方では本多忠勝らの諸将も参戦、対する今川方は城将朝比奈泰朝らが応戦、今川方百余人（徳川方六十余人）の戦死者を出すものの攻略には至りませんでした。



笠町砦縄張図

掛川城の東700mの独立丘陵にある砦で、現在は神明宮が鎮座。社が建つ平場を本曲輪とし、掛川城に対峙する南西側に階段状に配置された腰曲輪が残る。



天王山砦縄張図

掛川城の北900mの丘陵にある砦で、家康が指揮を執った本陣が置かれた。現在は、龍尾神社が鎮座。明瞭な遺構はないが、古墳を利用した物見台が残る。

※5【砦・陣城・本陣】戦国時代、城攻めの戦法として、攻撃側が敵城の周囲に簡易かつ臨時的な要塞をこく短時間に多数構築し、敵城への兵や物資の補給を絶ち孤立させ、最終的に開城（降伏）させるもので、戦国時代末期に多くの合戦で用いられた。本陣とは、城砦群の中で中核をなし、総大将が指揮を執る本営のこと。



この城には
ドラマがある
The Castle
is Dramatic

「四」講和、そして開城へ

家康は十六にも及ぶ陣城による包囲と波状攻撃を展開しましたが、予想以上の今川勢の抵抗にあい、攻略どころか戦況の好転もみられませんでした。家臣からの進言もあり、力攻めは困難として、講和交渉が三月四日から始まりました。この頃、家康は堀江城の大沢基胤や天方城の天野藤秀らの西遠、北遠の抵抗勢力への執拗な調略※6を行っており、未だ遠江国内が不安定であったことがわかります。家康にとって、掛川城がこのほか堅固であったことに加え、この不安定下での長期戦は何とか避けたいため、和睦による開城へと決断せざるを得なかったとも言えます。

五月六日、講和が成立、掛川城は十五日に徳川方に明け渡され、氏真は戸倉城「清水町」(大平城「沼津市」とも)を経由し、北条氏を頼り小田原に入りました。名門今川氏は、掛川の地で終焉を迎えたのです。

家康は重臣石川家成を城将に置き、本丸虎口をはじめとする城郭主要部の大改修を実施しました。今川氏滅亡後から豊臣秀吉の全国統一により徳川氏が関東に移封されるまでの約二十年間、掛川城は徳川方にとっての遠江の要衝の城郭に位置付けられました。

天正1576・1580年

大規模な徳川の普請跡 | chapter 2

掛川城における徳川家康の痕跡

「一」徳川領有時代の掛川城とは

天正十八年(一五九〇)、徳川家康四十九歳の時、豊臣秀吉により天下統一され、それまで掛川城を含めた遠江を領有していた家康は関東に移封されてしまいます。掛川城には豊臣配下の山内一豊が入城します。山内一豊は、石垣、天守に代表される高層の瓦葺き建物、礎石建物等の往時の築城における最新技術を導入し、近世掛川城の礎を築きました。現在、復元整

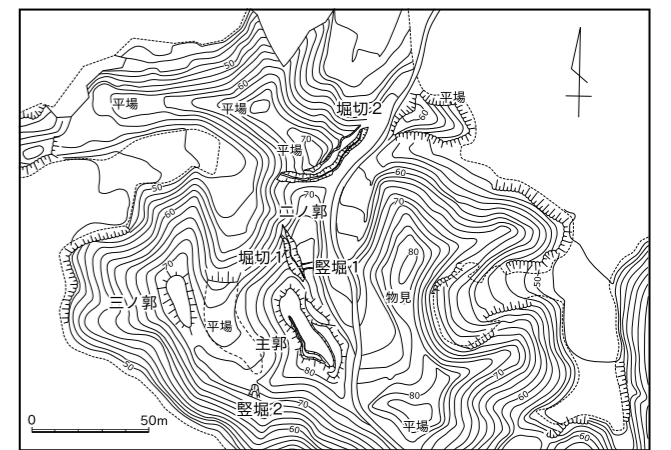
掛川城攻め城砦群

16の城砦の内、家康が指揮を執った本陣は、相谷砦と天王山砦だった。掛川城攻めの間、家康は浜松城からたびたび本陣に出陣していた。長谷砦には、酒井忠次、後に掛川城主となる石川家成が就き、青田山砦には、三方衆とともに後に高天神城主となる小笠原信興の名も見える。掛川城に最も近い笠町砦には、岡崎衆が配置されていた。この時代の砦は、平場である曲輪を造るほか、防備として柵を設ける程度の比較的簡便なものであったが、目的や場所により若干の機能差が見られる。



青田山砦から北方(掛川城方面)を望む

掛川城の南方を押さえる砦のなかでも、眺望が効き、かつ機動性にも優れていたのが青田山砦。



杉谷城全体図

青田山砦とともに掛川城の南方の押さえを担った。街道(塩の道)を押さえ、監視するための曲輪・堀切のほか、兵を駐屯させる平場があった。発掘調査後、区画整理により消滅した。

備されている掛川城は、山内一豊により近世城郭としての礎が築かれ、その後、整備と拡張が進められた十七世紀中頃の様子がイメージされています。徳川家康が領有していた永禄十二年(一五六九)から天正十八年(一五九〇)「家康二十八〜四十九歳」までの戦国期掛川城の様相は不明な点が多いため、往時をイメージすることは難しいのが実情です。ただし、この時代の掛川城には石垣、瓦葺きの建物、天守は存在しませんでした。

このように、天守に代表される近世城郭として語られることの多い掛川城は、中世城郭としての痕跡を見出すことも難しい状況にあります。とは言え、徳川氏が領有していた戦国時代の二十余年、掛川城は徳川氏の手により改修されていたと考えられます。とりわけ、武田氏との抗争が続いていた領有直後は、対武田氏の最前線に位置する城郭として改修された可能性が極めて高いはず。残念ながら、それを示す文献史料は存在しません。

「二」発掘調査からみた徳川家康の痕跡

徳川氏の改修の痕跡は、発掘調査により発見されました。家康の痕跡もしくは影響下にあった具体的な箇所とは、掛川城主要部の出入



掛川城本丸虎口発掘調査

平成5年(1993)の発掘調査で姿を現した本丸虎口。三日月堀・十露盤堀・内堀(松尾池)で囲まれた技巧性を駆使した造りとなっている(P16参照)。幕末、二の丸御殿が建てられる前は、御殿の庭先もしくは御殿の下にまで十露盤堀が及んでいた。内堀(松尾池)は、さらに西側に延びていた。

※6【調略】内通者(スパイ)を使って敵の中心人物を寝返らせたり、降伏させたり、謀反をおこさせたりするように仕向けること。

元明暦 1655年
 霊廟内部は限定公開 | chapter 3

三代将軍徳川家光の霊廟
りゅうげいんたいゆういん
龍華院大猷院
おたまや
霊屋について

【二】龍華院大猷院霊屋の沿革

徳川家康による掛川城攻めの際、掛川城に籠った今川・朝比奈方の出城として用いられた掛川古城の本曲輪には、龍華院大猷院霊屋が鎮座しています。龍華院大猷院霊屋（以下、霊屋）とは、明暦元年（一六五五）掛川藩主の北条氏重が、徳川幕府三代将軍徳川家光（大猷院は家光の戒名）の霊牌を安置するために建立した霊屋です。霊屋建立後は江戸の寛永

り口にあたる本丸虎口（三日月堀・十露盤堀・内堀（松尾池）で囲まれた空間）で、現在でもその威容を目にすることができません。三つの堀に囲郭された虎口は、馬出空間を備えた枳形虎口とも見え、非常に技巧的な虎口であると評価されています（P16参照）。この技巧的な虎口が造られた時期について、発掘調査の結果、今川氏配下の朝比奈氏による築城よりも後であり、かつ山内一豊が入城するよりも前であることが判明しています。すなわち本丸虎口の構築は、徳川家康によるものと言えます。また、遠江においてこのような大規模かつ技巧的な虎口は、十六世紀後半以降にならな



霧吹き井戸

天守入り口に現存する井戸。家康が今川氏の籠る掛川城を攻めた際、井戸から立ち込めた霧が城を包み守ったと伝わる。

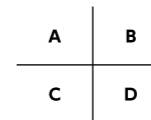
をあげると、掛川城の本丸虎口と同様、大規模な三日月堀と横堀を駆使した諏訪原城（島田市）の馬出虎口は、これまで武田氏によるものとされてきましたが、発掘調査と近年の研究によれば、ほとんどが天正六年（一五七八）以降の徳川氏の大改修によるものであることが判明しています。このように発掘調査結果と周辺の城郭の様相を勘案すると、掛川城本丸虎口は三日月堀・十露盤堀・内堀（松尾池）と馬出状の空間を兼ね備えた大規模かつ技巧的な虎口として、徳川家康により天正年間のはじめ頃（一五七六〜八〇）に構築されたものと結論付けることができます。

掛川城において、『正保城絵図』に代表されるような外堀により城下を囲郭した、惣構としての縄張が近世掛川城の端緒となったものであるとの見解には異論はないでしょう。これまで山内一豊以前の様相は不明な点も多く、そのため徳川氏以前の掛川城についてはどちらかと言えば過小評価されがちなきらいがありました。前述のように、本丸虎口の出枳形とも呼べる技巧的な虎口の原型は、徳川家康の時代（天正年間のはじめ頃）の遺構であり、徳川氏の普請がことのほか大規模なものであったことがわかります。



龍華院大猷院霊屋の内部

内部の中央には箱型の金装飾された天蓋（てんがい）が天井から吊るされ、周囲は瓔珞（ようらく：天蓋から吊るされた装身具）により華麗に装飾されている。最奥には、須弥壇（しゆみだん：仏壇の一番奥にあつて一段高い場所）上に鎮座する春日厨子（かすがずし：春日曼荼羅が描かれた、位牌の収納具）があり、厨子内部に大猷院霊牌が安置されている。 ※内部は常時公開されておりません。期間限定公開。



【A. 三日月堀の土層断面】徐々に埋没した下層と、人為的に埋められた上層に分かれる。
 【B. 三日月堀の石垣】発掘調査によって現れた三日月堀の石垣。三日月堀を埋める際に石垣の上層から中層は崩されていた。
 【C. 三日月堀の石垣】崩された石垣を撤去すると、積まれた状態の石垣が現れた。積まれた状態の石垣は、山内一豊時代のもの。
 【D. 三日月の穴列】さらに山内一豊時代の石垣の下から穴列が現れた。小型と大型の穴列が対を成し並んでいる。石垣が積まれる前（山内一豊時代より前）には、三日月堀の肩部に何らかの構造物が存在していた。

※7【枳形】虎口（城の出入口）の前面に方形の空間を設けることで、攻め手は直角に曲がらないと門へ入れず、守り手は攻め手に対し横側から攻撃できるような技巧的な虎口形態。曲輪の外側に飛び出して造られたものを外枳形（出枳形）と呼び、曲輪の内側に設けられたものを内枳形と呼ぶ。
 ※8【惣構】城中枢部のみならず城下町まで堀や土塁で囲んだ防衛ライン。 ※9【普請】城を造る際、設計図通りに曲輪を造ったり、堀を掘ったりする土木全般を指す。



寺から守僧を招き、寺号を龍華院としました。檀家を持つことを禁じられたため、城主から二〇石余を与えられ霊屋の守護・管理に当たりました。

文化十五年（二八一八）三月二日、掛川城下からの出火により霊屋は春日厨子と霊牌を残し焼失してしまいます。その後、文政五年（一八二二）時の藩主太田資始は、五年の歳月をかけ再建します。明治四十年（一九〇七）の大修理を経て、昭和二十九年（一九五四）一月に静岡県有形文化財に指定されました。昭和十五年（一九八〇）半解体修理と塗装工事が実施され現在に至ります。

【二】龍華院大猷院霊屋の構造

宝殿（本殿）は、間口、奥行ともに五・五mの方形造※10、屋根は頂部に擬宝珠※11をいただし、前面に一間の向拝※12が付属します。端正な外観に対し、屋根中央の大きな擬宝珠がアクセントとなっています。

向拝正面には唐草・剣模様等が極彩色で描かれ、徳川家紋の三つ葉葵が所々にアクセントとしてあしらわれています。特に木鼻（横木が柱から突き出した部分の彫刻）には象の頭部が立体的に彫刻、金箔が施されており、華麗



手扶（たばさみ：向拝柱の内側に、屋根の垂木勾配に沿って入れられた化粧板）には、金色の八重牡丹と葉が立体的に浮き彫りされている。



北条氏重肖像画（袋井市 上獄寺蔵）

さと躍動感が拝者の目を引きまします。

内部には、須弥壇と春日厨子（P10参照）が配置されています。その背後には蓮の花と葉を描いた来迎壁※13があり、春日厨子の中には大猷院霊牌が安置されています。格天井の格間には極彩色の花鳥風月が描かれ、外装に劣らぬ華麗さが演出されています。

内外ともに漆塗り、金箔張りと極彩色が施され、小規模ながら権現造の東照宮社殿を彷彿させる荘厳な装飾が特徴と言えます。

【三】氏重は家康の甥だった

霊屋を建立した北条氏重は、文禄四年（二五九五）甲斐武田氏の家臣、後に徳川家康の家臣となる名家保科正直の四男として生まれました。氏重の生母多却姫は、徳川家康の異父妹であり（家康の生母於大の方は、松平広忠に嫁ぎ家康を産む。しかし、後に於大の生家水野家が主君である今川氏と絶縁したため、今川氏との関係を維持する松平広忠は於大と離縁する。その後、於大は久松家に嫁ぎ多却姫を生む）、家康とは叔父と甥の関係、すなわち徳川家との非常に近い縁をもつ武将でした。

慶長十六年（一六一二）氏重は、小田原北条氏の一門である北条氏勝の養子となります。そ

も北条氏は天正一八年（二五九〇）小田原の役により滅亡しますが、その一門が家康の懇請により徳川氏の家臣となりました。

氏勝は江戸時代に下総国岩富藩二万石の城主となり、氏重が家督を継ぎました。その後、下野国富田藩二万石、遠江国久野藩一万石、下総国関宿藩二万石、駿河国田中藩二万五千石、遠江国掛川藩三万石と順調に増えられ転封を重ねていきました。ところが、氏重の子は五人すべて女子であったため、万治元年（一六五八）六十四歳で死去すると、世嗣断絶（世継ぎがないため家が断絶すること）のため改易※14となりました。

【四】龍華院大猷院霊屋建立の背景

氏重による霊屋建立の理由としては、世継ぎに恵まれなかったゆえのお家存続の切望とともに、幕府への政治的配慮、忠誠心のあらわれとして家光公の御霊を祀ったものとされています。

江戸時代の掛川藩には、徳川家康と血縁関係にある松平家をはじめとする譜代大名が代々藩主として入封していました。前述のように、掛川藩主となった氏重の生母多却姫は家康の異父妹であり、家康とは叔父と甥の関係という徳川家と非常に近い間柄にありまし



外面同様、内部にも徳川家紋の三つ葉葵が浮き彫りとしてあしらわれている。



格天井とは太い角材を井桁状に組んだ天井で、格式の高い建物に用いられる。

※13【来迎壁】仏堂の内部にある仏壇の後方の壁。
※14【改易】大名や旗本などの領地や屋敷を没収し、身分を取り上げること。

※10【方形造】隅棟がすべて屋根の頂点に集まる屋根の形式。
※11【擬宝珠】伝統的な建築物の装飾で、寺社の屋根、階段・高欄の柱の上に掛けられる飾り。
※12【向拝】日本の寺社建築において、仏堂や社殿の屋根の中央が前方に張り出した部分。



庄巻の規模を誇る掛川古城の「大堀切」

KAKEGAWA CASTLE COLUMN ②

掛川城コラム ②

末期養子制度とは



保科正之肖像画(福島県猪苗代町 土津神社蔵)

大名等の当主で世継ぎのない者が不慮の事故や急病などで死に瀕した場合、家の断絶を防ぐための措置としてとられた制度が末期養子制度でした。しかし、あくまでも緊急避難の措置であり、江戸時代のはじめ頃までは末期養子は禁止とされていたため、世継ぎがないことによる改易が改易全体の四割を占めていました。

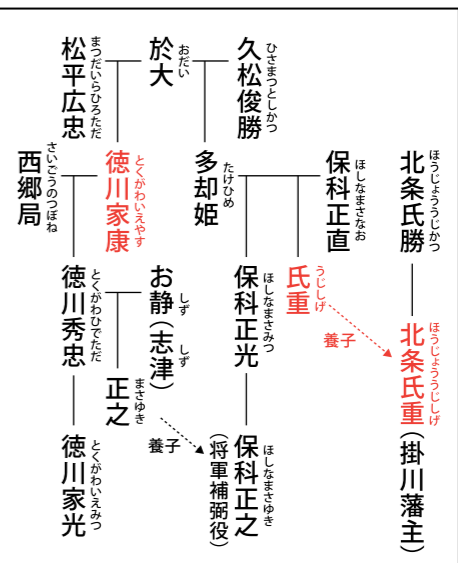
氏重のように世継ぎのない藩主をはじめとした武家の当主にとって、お家を存続させるための最終手段とも言える末期養子を幕府が禁止した理由とは、そもそも幕府は家臣などが当主を暗殺し、自らの都合のいい当主に掛け替えるなどの不法事態を危惧したことによる措置とも言われます。しかし、実際には幕府が大名の力を削ぎ統制力を強めることが最大の理由だと考えられています。

幕藩体制が未だ確立していない黎明期には、一定の効果がありました。ところが、世継ぎがないために改易により取り潰される大名家が続出、大名家を支えていた武士の多くが浪人となり社会不安が増すことになってしまいました。寛永14年(1637)に起こった島原の乱では、多くの浪人が一揆に加わり鎮圧を困難にさせた要因とされます。また、慶安4年(1651)由井正雪ら浪人が徒党を組み幕府転覆を謀った慶安の変(由井正雪の乱)は、幕府による大名統制策を変換させる大きな一因となりました。慶安4年(1651)幕府は末期養子の禁止を解きますが、実際には緩和措置がとられました。ちなみに、この緩和策を講じたのは、当時幕府の重臣として四代将軍家綱を補佐していた保科正之でした。正之は、氏重の甥にあたります。

末期養子の禁止が緩和され、50歳以内の者に限り認められるようになりました。ところが、氏重の子は5人すべて女子であったため、万治元年(1658)64歳で死去すると、世嗣断絶(世継ぎがないため家が断絶すること)のため改易となりました。末期養子緩和は、高齢であった氏重には適用されませんでした。

た。しかし、北条家の養子となっていたことから、名門北条氏とは言え大名の出自としては外様であり、対外的にも外様として認知されていません。氏重にとって、世継ぎに恵まれないが故の家名存続への憂いとともに、血筋としては徳川家の縁者でありながら外様としての境遇への忸怩たる思いがあったであろうことは想像に難くありません。外様であるが故の幕府に対するより一層の忠誠心の明示的なあらわれとして、さらにお家存続への切なる祈念も込めた最後の望みとして、霊屋を建立したのと考えられます。そして何よりも、將軍を祀る霊屋建立は自由勝手にできるものではなく、氏重と家康

との近しい関係により、霊屋建立が許可されたのです。氏重にとって、名門北条氏のお家存続が絶望的な状況下、一縷の望みを掛け建立したのと考えられます。明暦二年(一六五六)徳川氏ゆかりの霊屋は完成し、その二年後、六十四歳で氏重はこの世を去ります。前述のように、徳川氏に係わる名門保科氏を出自とし、同じく名門北条氏の一門の家名存続と安泰を図ろうとした画策は、皮肉にも氏重一代で終わってしまいます。徳川家光を祀る霊屋ではありませんが、徳川幕府黎明期、新たな時代においてお家存続と安泰を図るべく奔走、知略を尽くすものの念願違わなかった武将氏重自身の鎮魂の霊屋とも映ります。



徳川家康を中心とした、徳川氏・北条氏・保科氏 相關図

「おわりに」

遠江の覇権をめぐる徳川家康が半年間を駆け奪取した掛川城、発掘調査などを分析していくと家康(以下、徳川氏)により大改修されたことがわかります。掛川城の本丸虎口にみられる技巧的な改修は、おそらく遠江の各地で展開された武田氏との攻防において、徳川氏が武田氏の築城術を取り込んだものと考えられます。武田氏や前代に比べ、堀と土塁の規模は大きくなりました。大規模化だけでなく、掛川城虎口ではその形状が矩形の柵形を指向した形態であり、それまでの馬出よりも戦術的に進んだ形態とも言えます。家康は築城術において、単に取り込むだけにとどまらず、改良を重ねていったと言ってもいいでしょう。

掛川古城の本曲輪に鎮座する龍華院大猷院霊屋(以下、霊屋) 建立の背景には、徳川幕府黎明期の家名・イエの存続を切に願った藩主北条氏重の悲哀が垣間見られます。北条氏重は、家康と叔父・甥の関係にありました。また、徳川家と関係をもつ名家保科氏を出自とし、さらに戦国大名後北条氏の二門を継ぐ命運を担った人物であり、家名・イエの存続には並々ならぬ思いの中で霊屋を建立しました。結果的に、家名・イエを残すことは叶いませんでしたが、霊屋は現在にも受け継がれ、その建立者の北条氏重の名は現在の人々の記憶にも受け継がれています。

特別付録 戦国資料1

徳川家康が造った本丸虎口の構造と機能

徳川家康の影響下で造られた掛川城本丸虎口、その構造と機能を探ってみましょう。

三日月堀・十露盤堀・内堀（松尾池）に囲郭された本丸虎口は、攻めにくく守りやすいように工夫されていることが特徴です。一般的に三日月堀を配した虎口（城の出入り口）は、馬出と呼ばれます。虎口の前面に三日月堀と呼ばれる半円形の空堀を配した小さな曲輪を設け、その小曲輪が前線基地と防御拠点の役を果たします。

門の前面に馬出があると一見邪魔なように見えますが、攻め手は馬出があることで真っ直ぐに虎口に攻め込むことができません。また、馬出内からは鉄砲や弓矢で攻め手に攻撃することができます。半円形状になっているため死角が発生しないようになっていることも特徴です。さらに攻め手がひるんだら、両脇の虎口から打って出る追撃も可能です。撤収の際には、馬出からの掩護射撃により速やかかつ安全に撤収することができます。

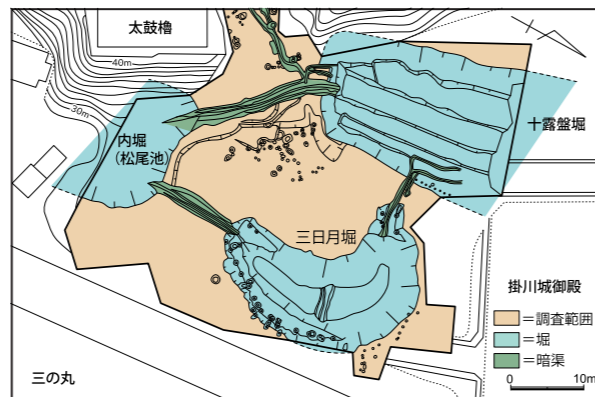
三日月堀を用いた馬出はその形状から丸馬出と呼ばれ、諏訪原城（島田市）、小山城（吉田町）などの武田氏によって築かれた城郭に見られます。

掛川城の三日月堀・十露盤堀・内堀（松尾池）に囲郭された本丸虎口も馬出と同様の機能を有していたと考えられます。近年の発掘調査や研究によれば、諏訪原城の丸馬出は

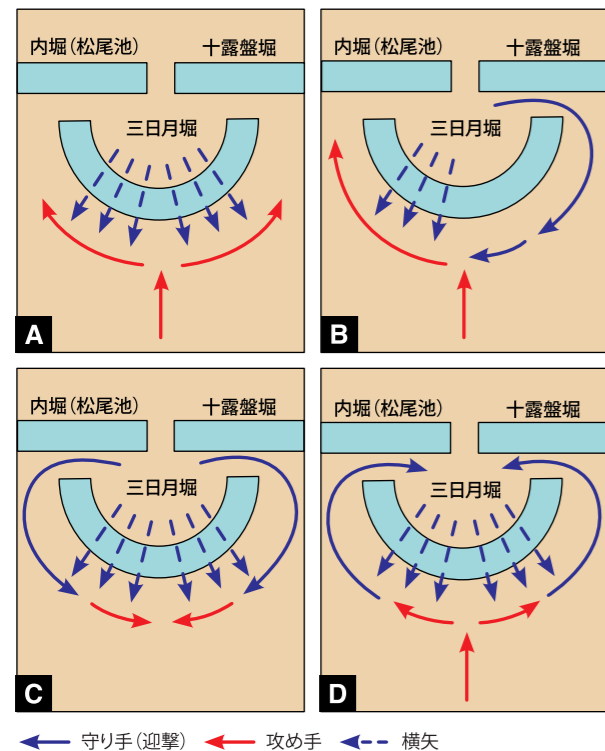
天正6年（1578）頃、徳川氏の改修によって規模が拡張されたものであることが判明しています。掛川城の本丸虎口も同じ頃に徳川氏により築かれたと考えられます。掛川城の場合、三日月堀背後の十露盤堀と内堀が食い違うようにずらされていること、三日月堀が弧を描くと言うより十露盤堀と内堀に対し矩形を呈すように配置されていることから、馬出より進んだ型式の枡形※16を指向した形態とも見えます。



掛川城本丸虎口



掛川城本丸虎口平面図



- A** 攻め手は三日月堀により左右に分断され、守り手は馬出内から横矢（側面）攻撃できる。
- B** 攻め手がどちらか一方に戦力を集中した場合、反対の虎口から出撃し、その後方から攻めることができる。
- C** 横矢により攻め手の攻撃力が低下したら、すかさず両虎口から出撃することができる。
- D** 守り手が撤収する際は、馬出内から掩護の攻撃を行い速やかに撤収できる。

← 守り手（迎撃） → 攻め手 ← 横矢

※16 【枡形】 虎口（城の出入口）の前面に方形の空間を設けることで、攻め手は直角に曲がらないと門へ入れず、守り手は攻め手に対し横側から攻撃できるような技巧的な虎口形態。曲輪の外側に飛び出して進られるものを外枡形（出枡形）と呼び、曲輪の内側に設けられたものを内枡形と呼ぶ。

西郷局（おあい）

徳川家康の側室、二代将軍徳川秀忠の生母

西郷局（おあい）は「家康最愛の側室」、苦難の家康を支えた「糟糠の妻」などといわれます。しかし、西郷局に関する信頼できる史料はわずかで、その出自をはじめとする生前の様子は不明な点が多いのが実情です。通説では、戦国時代（十六世紀中頃）、おあいは今川氏配下の遠江国上西郷村（掛川市）の戸塚忠春（戸塚五郎大夫）を父とし、同じく今川氏配下の三河国八名郡（愛知県豊橋市）の西郷正勝の娘を母とし、上西郷構江にて生を享けます。生年については、天文二十二年（一五五三）とも永禄五年（一五六二）ともいわれます。おあいは、母の実家である西郷正勝の嫡孫義勝に嫁ぎ二児をもうけます。義勝の戦死後、おあいは叔父西郷清員の養女となり浜松城に出仕していたところ、天正六年（一五七八）、徳川家康の目にとまり側室となり、西郷局と呼ばれるようになります。天正七年（一五七九）秀忠（二代将軍）を、その翌年に忠吉（尾張藩主）を産みました。以上が通説です。

しかし、十七世紀までの文献に、西郷局は戸塚忠春の娘という記述は見えないものの、西郷義勝に嫁いだことや西郷清員の養女になったことなど三河西郷氏との関係は記されています。西郷局が三河西郷氏と深い関係にあるという通説は、江戸時代後半に成立したものです。確実なのは、西郷局の名前が「あい」で徳川家中では「西郷」と呼ばれていたこと、上西郷村の戸塚五郎大夫の娘ということ、氏神は同村の五社神社と弓箭八幡、戸塚家の菩提寺が法泉寺ということぐらいです。

西郷局は天正十七年（一五八九）五月十九日に駿府で亡くなり、二十四日に法要が営まれました。その法要には有力家臣が参列していることから、西郷局が徳川家中で重きをなしていたとみることができそうです。また、天正十一年（一五八三）正月に家康は、西郷局が産んだわずか五歳の長丸（後の秀忠）を後継者として披露していますが、これも西郷局の存在が大きかったことを示しています。

生涯を閉じた西郷局は、駿府の竜泉寺（静岡市）に葬られました。

※15 【和讃】 仏菩薩の教えや高僧などの行跡を和語でたえた説経（仏教歌謡）



弓箭八幡宮



西郷局肖像（静岡市 宝台院蔵）

息子の秀忠・孫の家光は寛永五年（一六二八）の三十三回忌を機に竜泉寺を移転・拡張し大寺院を建立、寺名も宝台院と改めました。西郷局の墓石は現在でも境内に鎮座しています。

上西郷（構江）には、西郷局の生誕地とされる屋敷跡（以下、構江屋敷）が伝わっています。屋敷を構えていた周辺が「屋敷構え」「構江」の地名の由来とされ、現在は公民館・民家・水田になっており往時の面影を偲ぶことは難しいのですが、公民館の横には代々伝わる屋敷の家神様とされる齋屋を祀る祠が残っており、現在でも毎年九月二十三日「いつき菩薩和讃祭」として地元の方々により手厚く祀られ続けています。

また、構江屋敷跡の北東六〇〇m程の地点にある五社神社は、西郷局の産土神社として崇敬され、秀忠の誕生にあたりこの神社を分霊し、秀忠の産土神社とされたのが浜松市の五社神社であると考えられます。

さらに構江屋敷跡周辺には、図書屋敷跡・東門などの構江屋敷に関わるとみられる地名が残っており、戸塚忠春の位牌があった観音寺跡、西郷局の氏神のつ弓箭八幡の小祠をはじめとする西郷局にかかわる史跡・旧跡も残されています。



掛川市上西郷（構江）地区の西郷局にかかわる史跡・旧跡



西郷局墓石（静岡市 宝台院蔵）

掛川古城

掛川城から徒歩 5 分

1. 掛川古城の沿革

するが 駿河を安定化させた駿河守護今川氏は、文明6年(1474)今川義忠が懸葦荘代官職に就くと隣国遠江への侵攻を開始、その一環として今川氏の重臣朝比奈氏により築かれたのが掛川古城です。掛川古城が築かれたのは、明応年間はじめ(1492年頃)と考えられます。

16世紀前半、朝比奈泰能(二代)の代になると、今川氏の勢力拡大に伴う城域拡張の必要から、現在の地に新城が築かれます。新城築城後の掛川古城がどのように利用されたかはわかりませんが、次に歴史上の舞台に現れるのは永禄11年(1568)の徳川家康による掛川城攻めです。掛川古城は今川・朝比奈方の出城に用いられ、古城ならびに周辺において複数回にわたり小競り合いが繰り返されました。半年余りの攻防の末、掛川城は開城しました。

徳川氏の領有となった掛川城は、対武田氏との最前線に位置する城郭として大改修されることになります(P16参照)。

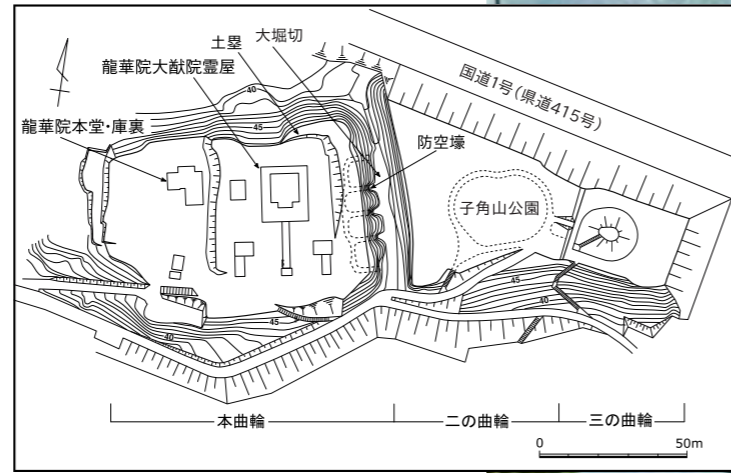
2. 掛川古城の縄張(構造)と大堀切

掛川城から北西 500m程の丘陵にあります。東西に長軸をもつ丘陵上に、本曲輪・二の曲輪・三の曲輪が直列に配置されています。龍華院大猷院霊屋(以下、霊屋)が鎮座する最高所に本曲輪を置き、大堀切を挟み東に二の曲輪・三の曲輪が配置されています。

本曲輪の東から北東にかけては高さ 1.5m、幅 10m程の土塁が残されています。土塁と並んで掛川古城の遺構として注目されるのが、本曲輪と二の曲輪を分断する大堀切で、現状での規模は長さ 65m、幅 15m、深さ 7mを測り現在でも見る者を圧倒します。城として使われなくなって 450 余年、埋没と崩落により形状が変化しており、部分的な発掘調査により戦国時代の規模が明らかになりま

した。土塁まで含めたその深さは 12m、上部幅 15m、底部幅 2mを測る巨大な堀切であることが判明しました。また、大堀切の壁は 60 度近い急角度で立ち上がるもので、堀底から見上げる様はまさに絶壁として映ります。

堀切そのものは、朝比奈氏(今川氏)の時代にも存在したと考えられますが、往時の規模はこれほど大規模なものでありませんでした。遠江において、このような大規模な堀が採用されるのは天正年間(1573~92)頃とされており、掛川古城においては、永禄12年(1569)掛川城攻めで今川氏から徳川氏への城郭となっていることから、徳川氏により改修された可能性が高いと考えられます。



掛川古城平面図

市街地にあるがゆえに改変を受けているものの、曲輪・土塁・堀切等の遺構がよく遺されている。

豊臣配下を経て徳川幕府下においては譜代大名の城となりますが、しばらく掛川古城に関する記録は見られません。明暦2年(1656)、時の藩主北条氏重により、本曲輪に徳川三代將軍家光の霊牌を祀る龍華院大猷院霊屋が建立されます。文化15年(1818)に焼失しますが、文政5年(1822)時の藩主太田資始により再建されます。

近世以降は、国道1号(県道415号)の開通による北部の削平、二の曲輪から三の曲輪にかけて水道水源施設による改変等を受けつつ、平成には公園として整備され、中世山城としての景観を残しながら現在に至っています。



掛川古城の縄張(構造)



① 大堀切
本曲輪と二の曲輪を分断する大堀切。山城において、これだけ大規模な堀切は稀有。



② 本曲輪土塁
幅10m、現存高1.5mを測る。往時は2~3m程の高さがあった。



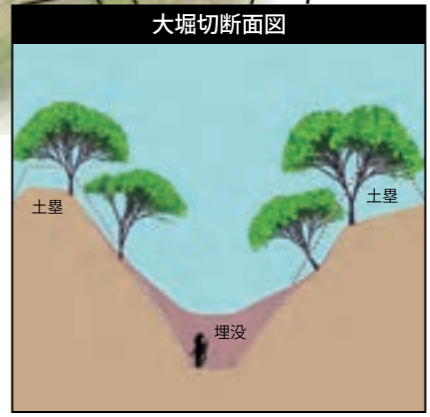
③ 掛川古城から天王山砦を望む
こんもりとした小山が天王山砦。砦に適した独立丘陵であることがわかる。



④ 本曲輪
本曲輪は二段から成り、高い箇所に龍華院大猷院霊屋が鎮座する。



遠江守護斯波氏に近い勢力、横地・勝間田氏の室町幕府奉公衆、井伊・天野・原氏など後に国衆へと成長する勢力がモザイク状に割拠する複雑な様相を呈していた。



450 余年を経て、土塁は崩れ、堀は半分埋没。堀の斜面にも樹木が鬱蒼とはびこる。